

市町村名	湯梨浜町
取組の内容	地域性を生かし体験学習と連動した食育の推進 ～食を通してふるさと泊を誇りに思う児童の育成～

学校の概要

湯梨浜町立泊小学校は、鳥取県中部の海沿いに位置している。山と海が隣接している自然豊かな地域の中にあり、児童115名、教職員23名の小規模な学校である。湯梨浜町の特定地域選択地域制により、町内羽合地域の児童も通学している。調理場があるランチルームは本校の特徴の一つで、地域との関わりを目指して地場産物を積極的に給食に取り入れている。

1 ねらい

地域を知り、地域とより深くつながることを目標に、社会科や総合的な学習の時間に、体験学習を行っている。体験学習と給食との連動を図ることで、地域の食材や産業への理解を深め、「ふるさと泊」を大切に思う心を育むことを目指す。

2 日時 令和5年度

3 場所 湯梨浜町立泊小学校

4 具体的な取組内容

(1) 体験学習

①二十世紀梨の栽培 (3年生総合的な学習の時間)

【3年生が栽培した二十世紀梨】

給食での提供と合わせて、生産者から児童に向けたビデオを制作放映した。制作にあたっては、梨作りの歴史や栽培の工夫、やりがいなどについて聞き取りを行い、学習内容が深まるよう留意した。体験学習の場面以外にも、手間暇をかけて実ったことを知り、自分たちの住む地域の特徴や歴史の深さを認識する機会となった。



②ワカメの根付・収穫 (3年生総合的な学習の時間)

3年生全員で収穫したワカメを給食で提供した。

みそ汁には、茎ワカメの部分も刻んで加え、部位によって異なるワカメの食感が楽しめるように工夫した。給食時には、ワカメの収穫について写真等の視覚的資料を用いて指導を行った。ワカメの食感に注目しながら給食を食べる様子がみられた。



【泊わかめのみそ汁】

③アジ釣り体験 (4年生以上学級活動)

泊漁港の海の環境や生息する魚について学びアジ釣りを体験する。関心を高めるため事前に給食で地元産のアジをフライとして提供した。

アジの生態や調理法についての掲示を用いた



【アジフライ】

説明やアジに関するクイズを行い、知識や関心をもって体験学習を行えた。



④ほうれんそう農家への訪問（3年生社会科）

「とまりほうれんそう」は、地域の特産品のひとつである。ほうれんそう農家を訪問し、栽培の喜びや苦勞、給食への出荷状況などを聞いた。訪問後の給食に登場したほうれんそうが、話を聞いた生産者が栽培したものだと知ると、自然と「おいしく食べよう」「残さず食べよう」と声をかけ合う姿が見られた。その後もほうれんそうが給食に出る度に、尋ねる児童もいた。給食での「とまりほうれんそう」の使用を前年度の2倍量、使用回数は年間40回以上とした。



(2) 地域と学校給食をつなぐ取組

①ウニの学習（5年生総合的な学習の時間）

泊漁港周辺の海の環境について、5年生が【ウニ・サザエご飯】総合的な学習の時間で学んだことを発表し、ウニの炊き込みご飯を全校児童の給食で提供した。

泊漁港への見学を通しウニの駆除や活用方法を知り、身近な自然環境保全の取り組み方を学びきっかけとなった。

②ボランティア感謝集会

学習に関わっていただいた地域ボランティアの方々を招き、感謝集会を行った。

各学年が学習の感想を発表したり、地域学習について3年生が梨の生産者の方へ感謝の気持ちを伝えたりした。

③学校創立150周年お祝い企画

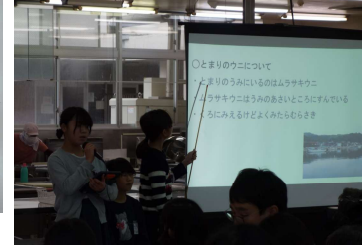
広報部が給食アンケートを実施し、人気の給食について広報誌で発表した。当時大人気であった【いかのプロパンサール】を給食に取り入れた。

④学校独自の給食週間の取り組み

本校は、11月に給食週間を設け、給食について理解を深める1週間としている。湯梨浜町では、毎月19日の食育の日を、【ゆりはまとっとりうまいDAY】とし、湯梨浜町・鳥取県の食材や特産品を活かした献立の日としている。委員会が、うまいDAYのビデオを作成し、視聴した。



【ウニ・サザエご飯】



【思い出給食】



5 成果

・「自分たちの住んでいる地域のことを知りたい」と思う児童が、前年度80%から85%に5ポイント上昇した。自分たちの収穫物を給食で食べるという経験は、体験の楽しさや喜び、新たに得た知識と地元の味覚を結び付ける効果につながった。友達との考えの共有や地域の方々との交流による相乗効果も大きかったと思われる。

・「自分たちの住んでいる地域はよいところだ」と思う児童は、前年度95%から97%に2ポイント上昇した。体験学習に伴う地域の方々との交流、動画視聴など地域の素晴らしさを感じる機会があったことが効果的だったと思われる。



・「給食や食べ物についての話を聞くのが楽しみ」と感じている児童は、前年度68%から73%に5ポイント上昇した。給食時間に視覚的資料を活用したり、委員会活動を活用し児童からの情報発信を行うようにしたりしたことが理由に挙げられる。献立作成の充実を図ったことも、給食を楽しみにしている児童が増えた要因だと思われる。献立を教材として活用することの重要性を改めて感じた。

年度	自分たちの住んでいる地域のことを知りたいと思う児童	自分たちの住んでいる地域は良いところだと思う児童	給食や食べ物についての話を聞くのが楽しみな児童
R3	80%	95%	68%
R4	85% (+5%)	97% (+2%)	73% (+5%)

6 課題

・アンケート結果で「ゆりはま・とっとりうまいDAYを知っている児童」は令和3年度の66%に対して令和4年度は59%と7ポイント下がっていた。取組を開始して5年以上経過し毎月実施しているにも関わらず、児童の学びにあまり繋がっていないことがわかった。体験学習との連動のように、学習とリンクさせたり、より地域の方の協力を得るよう働きかけたりして、給食を通じた学びの充実につながるよう見直しを図りたい。

年度	食事を残さず食べている児童	ゆりはま・うまいDAYを知っている児童
R3	91%	66%
R4	92% (+1%)	59% (-7%)



・学校教育目標のひとつである「ふるさと教育」と給食との関連を図るよう今後も取り組んでいきたい。そのために、体験学習の内容について、担任や地域の方と綿密に共有しながら、栄養教諭による指導のタイミングや掲示資料の内容などをより効果的にできるように進めていきたい。

・児童の変化をよりの確に把握できるよう、取り組みの事前事後に実施するアンケート項目の工夫が課題

である。子どもたちが何を学び、どう生活に生かしていったのか、変容の様子を把握することができるよう、アンケートの実施時期や内容について改善を図っていききたい。

- ・給食委員会の取組みを行って満足するだけでなく、児童全員に印象に残るような取り組みになるよう、委員の達成感を持たせることで、日々の活動意欲が高まっていくよう働きかけていききたい。
- ・これらの課題を解決するために、食に関する指導の全体計画の見直しを図りながら、栄養教諭としての働きかけを積極的に行っていききたい。

7 今後の取組等

地域の食材に関する体験学習を行う中で、「泊地域のよさに気づき、ふるさとを大切にしよう」という気持ちが少しずつ育まれているようである。どのように地域食材が自分たちの食と関係しているのかに気づき、さらに故郷を大切にしようとする意識が深まるよう、教職員全体で共通理解を図りながら進めていききたい。